こころに灯をともす物語

小さな ひかり

あの日を忘れない。2011 年 3 月 11 日

すこしでも、ほのかでも、心に灯をともせたら。

生きるヒント、「キッカケコトバ」　　前沢しんじ

小さなひかり

●『小さなひかり』によせて

平成 23 年 3 月 11 日、
東北の地から遠くはなれている僕も、ふるえていました。
その地には僕の知人もいる、息子の勤め先の営業所のひともいる、
なにより、想像を絶する方々が、想像を絶する被害に遭っている・・・

その日から僕にとって、
「自分にいったい何ができるんだ？」ということが
頭から離れることはありませんでした。

それから 1 年と半年以上も過ぎて、

いまだにたいへんな状況にいる方々に、
僕になにかできることはないのか・・・

『そうだ、コトバはどうだろうか？』と思ったのです。

僕自身これまで生きてきた 60 年の人生で、
どれほど『言葉』に助けられたかわかりません。

つらいとき苦しいとき悲しいとき、
立ち直るキッカケをくれたのはいつも、『言葉』でした。

僕は 2010 年 4 月から、
少しでも、生きていくヒントにしてもらえればいいな、と考えて
「人生を変えるキッカケコトバ」というメールマガジンを発行しています。

読者はまだ 2000 人にも満たない小さなものですが、
「もう人生をおしまいにしようと思ったけどもう一度がんばってみます」という
お便りもいくつか頂いています。
もったいないほどの感想も 300 通を超えるほどになっています。

2012 年 9 月からは地方新聞にも連載が始まりました。

これなら、少しでもお役に立てるかも、と思いました。

僕のメルマガ「キッカケコトバ」は、

地方に住む、ごく普通の、不器用な、
失敗をたくさん積み重ねてきた 60 歳の男が、
いろいろ苦心して生きてきて、
でも今、人生の終盤で満足を感じて生きている・・・

そんな自分のからだを痛めて覚えた、身についたことばを書いたものです。

どの人の人生にも
僕はその人の生きてきた、かけがえのない軌跡を感じます。

生きていくうえでは、誰にもかならず苦労があります。
苦しみの大小はあれ、誰とてそれから逃れることはできないものです。

そんなとき、
ホッとさせてくれて、気持ちに水やりをしてくれるもの。

僕はそれが、「言葉」だと思っています。

「優しい言葉は、たとえかんたんな言葉でも、
　心にずっとずっとこだまする」と、マザー・テレサは言ったといいます。

この文集が少しでも、
今つらいところにいるひとの、
心の潤いになれば、と願ってやみません。

タイトルを『小さなひかり』としました。

すこしでも、ほのかでも、
被災地の方々の心に灯をともすことができれば
こんなうれしいことはありません。

2012 年 12 月

前沢しんじ

●僕のプロフィールです。　　**※特定の宗教、政治等とは関係ありません。**

・前沢しんじ　1951 年生まれ、和歌山県新宮市在住です。

・職業　　小売業の販売促進を企画する事務所を 30 年間やっています。

・家族　　妻と一男三女。ネコが 2 匹います。

・趣味　　365 日毎日 4 キロ～8 キロ歩いています。

・性格　　せっかちなO型で、てんびん座で、うさぎ年です。

・被災経験　　平成 23 年 9 月の紀伊半島大水害で床上浸水。知人もたくさん被災しました。

・人生経験　　口には出さないつらい経験を、いくつかしています。

・モットー　　いま自分ができることに、力を尽くす。

・私の最終目標　　生まれてきた以上、人のお役に立ちたい。

・著書　「人生の午後、男の居場所」（エッセイ）ほか数冊あります。

・ホームページ

◆公式サイト　http://maehan.jp　または「マエハンドットジェーピー」で検索

◆個人サイト　http://kikkakekotoba.net　または「キッカケコトバ」（カタカナ）で検索

◆フェイスブック　https://www.facebook.com/shinji.maezawa.9

◆プロフィール　http://maehan.jp/contents/ct_01/

●ぜひ、ご感想をお寄せください。メールはこちら⇒　maezawa@zb.ztv.ne.jp

もくじ

●第一章　「それでいいんだよ」

人生いろいろなことがある。みんながおなじものなどなにひとつない。
だから、自分のやりかたで、自分の生きかたでいいんだよ。

●第二章　「笑っちゃってくださいな」

いつもいっしょうけんめいであわてもので、マヌケで、エネルギーに満ちた
スーパーばばあ物語。戦争も笑いで生き抜いてきた母の物語を集めてみました。

●第三章　「人生は味わいの旅路」

家族や友人やいろいろな人とのふれあい。助けたり、助けられたり。うれしかったり、
悲しかったり。天気も曇りも、雨も雪もある。まるで人生は旅のようなもの。

●第四章　「いまを乗り切るヒント」

人生には、遅すぎるものなどなにひとつない。たったひとつの言葉が自分を助けて
くれることがある。この章では、今を乗り切っていく言葉を集めてみました。

●第五章　「明日への一歩」

わたしたちは生きている。生かされている。人生には遠回りなんかない。
いつでも、いまがはじまり。さあ、明日に向かってごいっしょしましょう。

第一章

「それでいいんだよ」

人生いろいろなことがある。

みんながおなじものなど

なにひとつない。

だから、

自分のやりかたで

自分の生きかたで

いいんだよ。

■タブレット型端末やスマートフォンでは、全体が見えないことがあります。
その場合は次の URL で再読み込みしていただくと読むことができます。
http://kikkakekotoba.net/PDF/tiisanahikari.pdf

家族のことを、だから「肉親」というんだ

●まだ見つからない妻を想って
63 才の夫は流された家の跡地にたたずむ、という。

何十年もいっしょに魚屋をやった。
この家のここが玄関、ここが廊下、ここが俺とおっかあが寝てたところ。

手料理がうまかったんだ、何でも。

毎週日曜日にはその場所に花を手向けに行く。

（2012 年 3 月 10 日朝日新聞より引用）

夫の想いは、妻に届いているのだろうか。

届いているに決まっているよ。

何十年も同じ家に住み、同じ時間を過ごしてきた。ずっといっしょだったんだ。

その心の半分は妻のようなもんじゃないか。
得意の料理を食ったそのカラダは妻が作ってくれたもの。
届くも届かないも、自分のなかに、すでにいるんだよ。

心に想うだけでじゅうぶん伝わっている。

【あとがき】

●書きながら想った。

この肉体は、結婚してから何十年も妻の手料理を食ってきた。

妻も同じものを食ってきた。

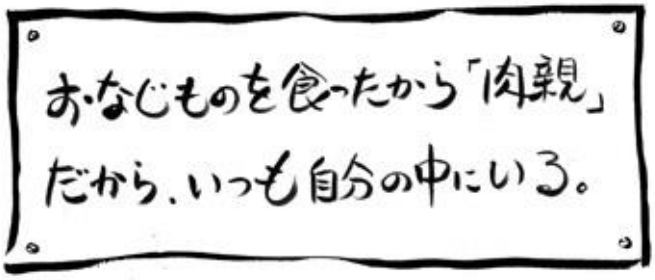
性別、顔、性格こそ違え、からだの中味、その肉体は同じものなのだ。

だから、家族のことを、「肉」親というんだ。

その存在は目には見えないが、
すでに自分のなかにいるんだよ、妻が。

それこそいちばん身近にいるその人を想えば・・・

共に生きていける。ともに生きている。



神様は、お急ぎでない

●日経流通新聞に連載されている檀ふみさんのエッセイ、「ありがとうございません」から。

檀さんがバルセロナに旅行して、あの有名な「サグラダ・ファミリア」という建造物を見た。

ガウディという建築家が建てはじめたものだ。

ゆったりとした速度で建築が進み、もうすでにガウディさんは亡くなっている。

設計図というものがなく、膨大な数の石膏模型をもとに進めていくので大変な手間がかかり、つまるところガウディさんの死後も、なお工事はゆったりと進むことになる。

そんな気の遠くなるような話しに檀さんは驚き、

「それじゃあ 1000 年たっても完成しないじゃないの!?」と言えば、

観光ガイドさんはこう答えた。

「ガウディさんはこう言いました」

「神様はお急ぎでない、と」

【あとがき】

●だよねぇ・・
急ぐのはどうも人間様の都合なのさ。

民族により、ゆったりやセカセカや、いろいろあるだろうし、

最近ではブータン王国の「国民総幸福量」という物差しが、なんだかゆったり感を想像させます。

ニホンは時間に正確で、電車とかは基本１分も狂わないし、

約束だってきっちり守ることが大前提になっている。

聞けば、電車や待ち合わせ時間が狂うのが当たり前のようなお国もあるらしい。

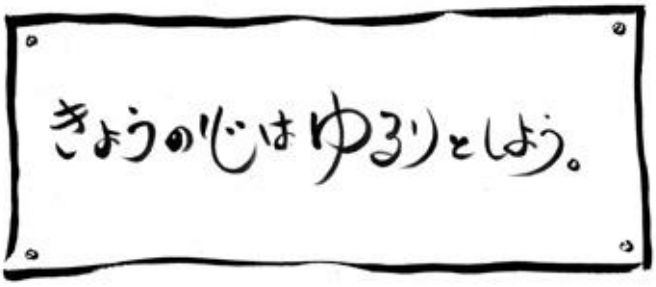
このガウディさんのお国はゆるりとしているらしい。

いやいや、どっちがどうって話しでもない。

ただ几帳面な国に住んでいると、たまにはこのお話しのような大雑把感あふれる世界も、
これまたいいなぁ・・と思う。

少なくとも心の中は、ゆるりとして大雑把で、おおらかでニコニコしていて、

広い宇宙が広がっているような、そんな場所をつくっておきたいといつも思っています。



後ろ向き、いいじゃないか

●『ポジティブシンキング』という、物事を前向きに考えようという考え方がある。

「モノは考えようだ。常に良い方に考えて生きていきましょう！」というものだ。

とてもいいと思う。

同じ現象でも考え方でどうにでもなるものね。
コップ半分の水を、「もう半分しかない」と考えずに、「まだ半分もある」と考える。

人生をうまく生きていくコツだろう。

一方で、『ネガティブシンキング』という、
ポジティブとは逆に、消極的、後ろ向きな考え方がある。

これもそうそう捨てたもんじゃない。いや、なかなか大事なんじゃないかな？・・と
思っていたら、興味深い新聞広告を見つけた。

五木寛之さんの著書「下山の思想」の広告にこうあった。少し長いが引用させていただく。

（以下引用）

どんなに深い絶望からも、人は起ちあがらざるを得ない。
すでに半世紀も前に、海も空も大地も、農薬と核に汚染され、
それでも草木は根づき私たちは生きてきた。
しかし、とここで著者は問う。

私たちの再生の目標はどこにあるのか。
敗戦から見事に登頂を果たした今こそ、
実り多き明日への、「下山」を思い描くべきではないか、と。

法然、親鸞、日蓮、道元など、すべての人々は山を下りた。

「登る」のではなく、「下山」するのだ。その先にある新たなスタート地点をめざして。

（ここまで引用）

日なたがあれば影があるごとくに、山があれば谷があるごとくに、

物事には陰と陽がある。これは万物の法則だ。

すべてが陽で、「前へ前へ！」というばかりでは成り立たないのだ。

少し立ち止まり、後ろを振り返り、場合によりゃあ、少々戻る・・

おおいにアリです。

そしてこの陰の部分が、実は「悪者」ではなく、

人間らしく生きていくために、心に潤いを与えて、思いに水分を与える、

「生きる養分」のようなものではないですかね。

悪くない、ぜんぜん。「後ろ向き」も。

【あとがき】

●僕は実はかなりの後ろ向き論者です。

結構ラクなんだよ、ネガティブは。なんてたってマイナス全肯定だもの。

そんなにできなくていいよ。できるところまでいいんだ。

あまりがんばられるとね、見てるオレもつらいよ。

急いでもそんなに結果は変わらないからゆっくりいこう。オレ経験者だから分かる。

精いっぱいやってるじゃないか。ここらへんでちょっとひと休みしよう。

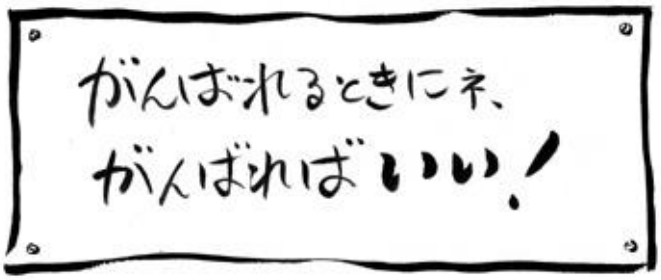
自分を救えるのは自分だよ。自分をだいじにしてあげようよ。

ひとりで苦しんでも、誰もよろこばないよ。

放っておくのも大事なこと。とりあえず置こうぜ。

後ろ向きでもじゅうぶん生きていける。

がんばれる時に、がんばればいい。



藤田まこと式

●昼間、テレビで藤田まことさんの刑事ドラマが放送されていた。

乙川音次郎という老刑事に扮している。70 才を超えたころの作品だろうか。

渋い。

よくあるような、動きのある刑事ものではなくゆったりと淡々と進む。
セリフもゆっくりだ。言葉一つ一つを大事する。

彼のもうひとつの刑事モノである「安浦刑事」と同じような設定だが、
同じ風体、同じ役どころでも、似ているようで実はぜんぜんちがう。
存在感とはかくあるものか。

彼を初めてみたのは大昔、ＮＨＫ「てなもんや三度笠」という劇場生放送のお笑い番組だった。
当時はコメディアンの風情で馬面、つまり顔の長さがネタでウリだった。

その後舞台や歌もやりつつ、あの「必殺仕事人」の中村主水となる。

すっかりそのキャラが定着したと思いきや、
年を加えて「剣客商売」の老剣士で老いの新境地を拓いた。

彼を見て思う。

「年をとるもの悪くない」。

老いは人生の終末でなく人間性の仕上げ。

動きが鈍くなるのは、衰えというより哀愁だ。

しゃべりがとろくなるのは、心が発することばだからだ。

シワが増えるのは、経験をものがたり、

腰が前屈みになるのは、生きてきた重みが勲章となっているからだ。

足の動きが機敏でなくなるのは、一歩一歩の大事さがわかった達人の足どりだ。

老いには魅力がある。

アンチエイジングよりも、「ちゃんと年をとる」こと。

堂々と、馬齢を重ねるのだ。

年をとるもの悪くない。

【あとがき】

●藤田まことさんから、年をとる面白さを学んだ気がする。

川の流れを想う。

生まれるのが水源ならば、

本流で人生の浮き沈みを経て、

やがて大海へ注ぐ直前の、海と川とが入り混じった淡水の老境となる。

そこでは川の流れもなくなり、ゆるやかに海と融合するのだ。

老境は忌み嫌うものでなく、その淀み、潤いを楽しむ最後の仕上げなのだろう。

堂々と年を加えていこう。

しあわせ

●こんな紀伊半島の田舎でも「ホームレス」的な人がいるのかと、
ちょっとビックリしたのです。

海岸近くの架橋の下にテントが張っていました。

ジャージとＴシャツの、すっかりくつろいだ格好をしたおじさんが、
小さいイスに座って簡易ガスコンロでラーメンを作っていた。

少しの間見ていたら、それを鍋ごと、実にうまそうにラーメンをすすっていた。

回りをみればキャンプのテントというよりはミニ我が家のようにタンス風のものも見える。
そこは雨をしのげる架橋下でもあるし、生活にはなかなかの環境。

こりゃ「ホームレスの人」だと思った。

感銘したのは「幸せそうにすするラーメン」だった。
うまそうに、いとおしそうに、一杯のインスタントラーメンを大事そうに食う。

事情はあるだろうがこういう状況においてさえ、
人は幸せを感じることができるのだということをこの目で確かめた気がする。

幸せに、小さくも、大きくもないようだ。

【あとがき】

●浜辺に掘っ立て小屋を立てて暮らすホームレスの人に、

折りにふれて食事を届けている知人がいた。

しかしそこは道路を開通するため立ち退きしなければならず、

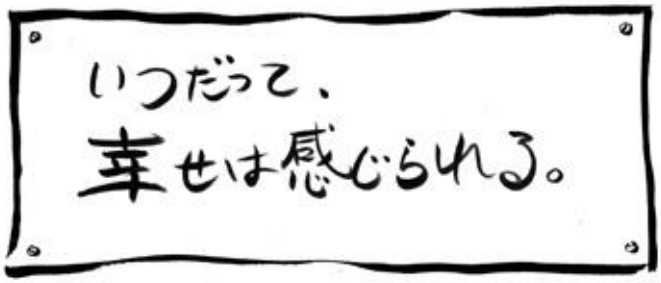
ある日気がついた時には小屋は撤去されて、その人はいなくなっていた。

どうやら市が市営住宅へ入居させたとか。

いつもそこにいた人がいなくなる寂しさを感じたという。

こんな優しい人が回りにたくさんいる。

この国はすばらしい。



弱者

●3.11 以来、人間のやることや、あらゆる人生のことについて、

自分のありかたをこれまでより深く考えるようになった。

こういう文章にも、ややとんがった攻撃的なモノ言いをするようになったと自覚しています。

10 年以上も前に、ひょんなことから心療内科にかかった時に「攻撃的な性格ですね」と医師に言われたことがありますが、自分の根幹にはそういう性徴があるのかも。

でもなぜなんだろう。

とんがった表現や、攻撃的な性格。

それは・・・

へへへ・・・

弱いからですョ。自分が。

弱い犬ほどよく吠えるって言いますが、アレはホントですヨ。
だから強がる。意地を張る。主張したがる。負けず嫌いになる。
ダメな人間でござんす、オレは。

だから、このキッカケコトバというエッセイは、実は自分に宛てて書いているようなもんです。

弱くてもいいんだぞ、逃げてもまったくＯＫだ、

情けなくてもちっともかまわん、強がりいってもいいじゃないか。

人間は誰もが弱いんだよ。だからそのままでいいぞ。

頑張れるところまでやりゃあいい。ムリするな。

・・・・

そんなことをいつも自分に言っています。

だから、

ここまで生きてこれた、そう思っています。

【あとがき】

●性善説とは、人間は善を行うべき道徳的本性をうまれながらにして持っている。

性悪説とは、自分がよければいいという欲望の本性をうまれながらにして持っている。

・・・・なんて解釈されるようですが、

僕は人間「性弱説」を唱えています。（エラそうなこと言ってスミマセン）

すべての人間が関係する事案は、その性根が良いから、悪いからでなく、

「弱い」から起きるんだ、というものです。

だから、まず、弱いところを認めてしまおう！と言いたい！

人間って弱いよ。ほんとに弱いんだよ。

弱くったって、いいんだよ。

時が解決することもある

●誰にでも「今が満足」なんてありません。

常に何か、不満、不足、不安、不利、不公平感などがあるワケです。

それに対して、

耐えるなり、知らんぷりするなり、考え方を変えるなり、

あるいは具体的に目標や対策を立てて動き出すかもしれない。

そうして、だんだんと足りないものへの対しかたも慣れてくるもの。

人間はそういう意味では強いものです。カンタンにつぶれやしませんよ。

そうして人生を歩いていくんだ。

そのうちはじめに思っていた「足りないもの」は、気にならなくなっていく。

時の流れはそういうもんだ。

つまるところ、「あとで考えるとたいしたことなかった」というのがほとんどです。

僕の体験による実感でもあります。

自分なりに頑張りながら、その時を待ちましょうぜ。

【あとがき】

●若いころは、その「時が解決する」的な、分かったような物言いが非常にきらいで、
受け入れられませんでした。

しかし、経験とはすごいもの。

「おまえがごたくを並べても、人生とはそういうもんじゃ！」と、
からだに叩き込まれました。

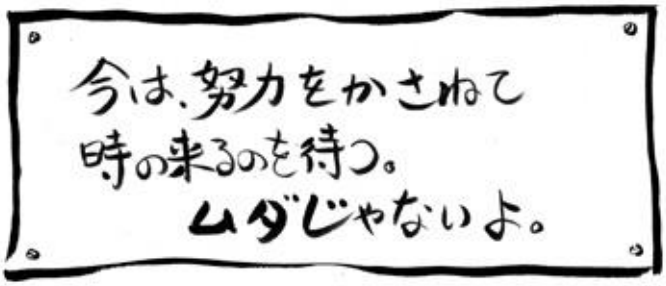
時のするこたぁ、強引だ。こっちの都合なんて聞いてくれやしません。

ただ、「時様」のいいところは

「自分の力を尽くす」ことを大いに奨励してくれる。

『おまえ、いまは、がんばる時期だぜ。』

『できるところまでやってみなよ』って。



肩の力をぬいていこう

●強い心など持たなくていいよ。

自分を苦しめるだけかもよ。

むしろそれなら、やわらかいこころのほうがいい。

そうすると少なくとも、自分を責めることはしないだろうよ。

肩のちからをぬこう。

そうすると、

力が入って上がっていた肩が、少し下に下がりませんか？

そして、

胸ではなく、腹を膨らませて

ハナから息を深く吸って、口からゆっくり長く吐ききる。

何回かくりかえしてみる。

ラクになると思いますヨ。

肩の力をぬいていきましょう。

【あとがき】

●いっしょうけんめい生きていると、ね、

いつのまにか、「リラックス」っていうヤツを忘れる。

からだと心にとって、リラックスがとても大事なこと。

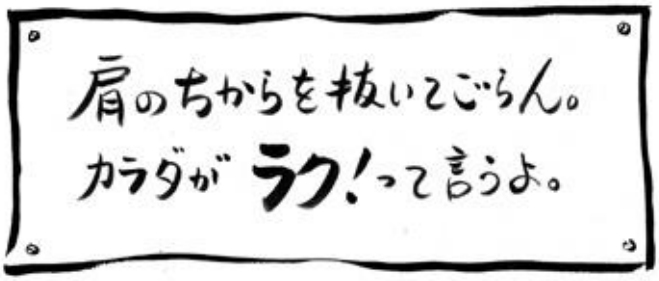
僕は自分が緊張症なので、

いつも肩の力を抜くように心がけています。

これはもう２０年も前に気功で身につけた技術です。

僕自身がずっとやってきて、とてもよかったので、

いま、緊張したり頭が固くなっている方に、おすすめします。



かしこくないんだ。でも・・・

●夕ぐれがうんと速くなってくる毎年 11 月ごろは、

郷愁に誘われて、センチメンタルなことを思うことが多いのです。

『オレはやっぱり、あんまりアタマ良くなかったなぁ・・』

僕は小さい頃からあわてものでせっかちでした。

それでも、何でも一生懸命に、まぁ頑張るわけです。

で、それなりに 60 年くらい生きてきて、ネ。

『オレはやっぱり、あんまりかしこくないなぁ』と。

じっくり考えているつもりでも、

どこかで焦っていて、

なんかドタバタ、ガサゴソしてネ。

それでも一生懸命な分だけ、ちゃんと生きてこれたとは思う。

もしかしたら、

「あんまりかしこくないおかげで」

「かえって、いい人生になってる」かもね。

・・・・いま、つくづくそう思うのです。

あわてものはあわてものなりに、

カシコクないものはカシコクないなりに、

ちゃんといい人生がくるよ。

オレが保証する。

【あとがき】

●こうすればトク、とか

こうすればもっと効率がいい、とか

こうすれば人より先に、とか

ビジネスでも、

生きていくうえでも

便利や速さを優先させてよかったことなどない。

いつも結局、愚直なまでに

ひとつずつ、一歩ずつ、

ゆっくり、のろのろと

やってきたんだけど、（あわてものだから、ホントは速くしたいんだけどネ）

どうも今、

とても満足した人生に仕上がっている。

お金とか、名誉とか、モノとかは持ってないけど、

でも、心の満足っちゅうの、

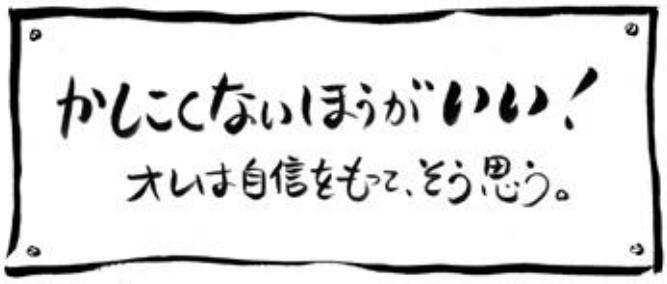
それがめちゃめちゃ、あるんだ。

もともと、物欲とかは昔から無いし、

人に喜ばれるのが好きだから、

そういうふうにしてきた。

まっ、そういうことなんだ。



●ぜひ、ご感想をお寄せください。メールはこちら⇒　maezawa@zb.ztv.ne.jp

第二章

「笑っちゃってくださいな」

この章は僕の母の物語を集めてみました。

いつもいっしょうけんめいで

あわてもので、マヌケで・・・

エネルギーに満ちたスーパーばばあであります。

戦時中世代で、

つらいことは経験済み。

笑いで生き抜いてきたお間抜け物語。

クスッとしてネ。

スーパーばばあ　1

●『なんでも笑ってしまおう！』という、ばかばかしいお話しを・・・

わが母は通称、「まいくばあ」といいます。

マイクという、以前飼っていた犬の名前をニックネームとして受けついで、
孫たちが「まいくばあ」と言いはじめて、その名が今じゃ一人歩きしているワケで。

最近の 80 才は元気な人が多いと思いますが、
その中でもこのばばあは、たぶんトップランナーです。

お盆に孫、ひ孫がまいくばあの家に遊びに行った。
（というか人気者なのでチビたちは入りびたり状態です）

夕方僕が車で迎えに行った。

「ワシも行くわ」と言うから、

「じゃ車へ乗っていけよ」と言うと、

「ワシャ自転車！」と言う。

そこから約１．５km 先の僕の家まで、自転車で車のあとを走り出した。
急に消えた、と思ったら同着で我が家についた。

「近道ぶっ飛ばしてきた」だって・・

車と同速度の 80 才の自転車ばばあ・・・

その帰り、大雨になった。

「オイ、車で送ってくよ」

「いらん！ワシャ濡れてもへーき」と言う。

さらに、「帰ったらフロへ飛び込んだらいいだけじゃ」と。

で、大雨の中を自転車で走って行った。

アイツ、おもしろいフロの入りかたするんです。

浴槽に 20 ㎝しか湯を溜めない。
そこに横ばいになってカラダをローリングする。

「水もったいない！」って。

ハンパないでしょ？

だから「フロに飛び込んだら・・」って言うけど、
その実は「風呂場に飛び込む」だけ。

ヘンなヤツ。

【あとがき】

●最近の迷語録をひとつ。

『ワシャねー、ずっと元気でいたい。
　動物人間になったらエライこっちゃ。』

おい、それ「植物人間」だろ！？

あんたは誰よりも「動物」人間だよ。

※本人は笑いを取ろうと思っているわけでは、もちろんございません。
　わが道を歩いているだけでござんす。
　80 歳といえば、幼少の時代に戦争を体験した世代。
　戦後の苦労は多くの方々とおなじ、激動の時代を生き抜いてきたつわものです。
　そんな中、苦労のなかにも笑いあり、で突っ走ってきた、そんなヤツであります。
　この章ではまいくばあシリーズでいくつかお笑いネタを紹介します！

スーパーばばあ　2

●うちの母は通称「まいく」。

もちろん外人じゃない。
これでもかっ！っていうくらいの日本製ババアです。（ゴメン、表現がお下品でした）

昔ダックスを飼っていて、そいつの名前がマイクで、
いつのまにかうちの子供達が、マイクばあ、マイクばあと呼び始めて、
犬が死んで、マイクという名前が飼い主に受け継がれたという寸法。

ほんとオモロイやつで、その方向音痴ぶりや語録については枚挙にいとまがありません。

最新のヤツの珍行動、語録から。

■僕に電話をかけてきて、

「あれ？声が小さいぞ！もしもーし！」と言って怒っている。

急に笑いだした。

「声が遠いと思ったら受話器が逆だったヨ」。

■「最近のばばあはトロイわ」と言っている。

話を聞いたら、自転車でトロトロ走るヤツがいて、
自分の自転車のジャマになることらしい。（自分がよく飛ばすので）

テメエもばばあじゃないか！

■熱心な仏教徒で（曹洞宗です）、毎日仏壇に、自分以外のことをとにかく頼みまくる。

家族、親戚、はては世界の子供たちが幸せでありますようにと。

それを毎日続ける。

必ずつけるコトバが、「ワシはどうなってもいいですので」。

いいヤツ。

■さいごに叙情的なお話しも・・

ウチは奥さんが両親の法事のため、断続的に４ヶ月ほど留守にしている。
ヤツがその代わりの家事やネコの世話などをやってくれているのだが、

たまにウチの奥さんが帰ってきて、炊事やらをしているのを見てひとこと。

「やっぱり女がおると台所がイキイキするねえ」。

「どうして？」と聞くと、

「湯沸かしの湯気とか、水の音とかね、ええもんじゃ」だって。

こんな慌て者の母でも、そういう叙情はもちあわせているらしい。

まっ、なんやかんや言っても、とてもいいヤツです。

【あとがき】

●いつまでも若いつもりでこき使っていたら、どうやらヤツは 80 才らしい。

最近は座って立つとき、ヒザが痛いので・・・

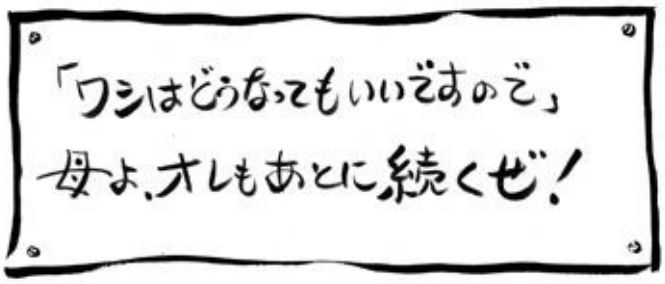
「ええかげんにせぇ！」と言って、

自分のヒザをゲンコで殴りつける。

ポキッといって楽になるらしい。

いったい、

なにものだ、こいつは？



スーパーばばあ　3

●まいくばあが、めずらしく病気になった。

「ワシャ背中が痛んでねえ、医者へ行ったら・・・」

「ヘルペスやった」。

年寄りにはヘルペスが多いと聞く。

けっこうな痛みと、治りの悪さが老人を苦しめるらしい。

ヤツも今回の痛みにはちょっと参ったらしい。

いつも自転車ぶっ飛ばすのに、
電話かけてきて「ちょっとクルマええか？」だって。

笑ってやった。

「あんたいつも人の病気とかニヤニヤ笑っとたけど、バチあたったんや」

「・・・・」

ヘラヘラしている。

さて、二、三日知らんぷりしておいて電話してみた。

「ハイハイ」

「おーどうよヘルペスは？」

「あーあれか、もう治った」

「！！！」

もちろん時に痛みが襲ってくるらしいが、
また自転車ばばあにカムバックして走り回っている。

スーパーばばあ健在だった。

ほんとに、ハンパじゃないなぁ。

【あとがき】

●でもね・・・

この前朝方アイツの夢をみた。

僕が妻に語っている。

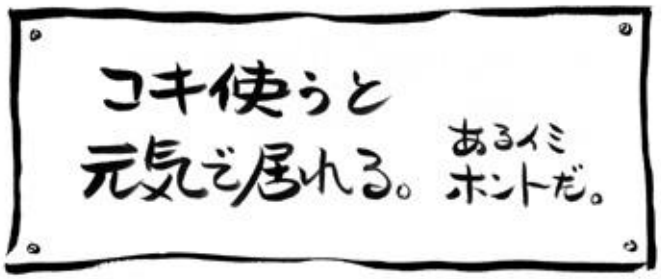
「あ～ぁ、まいくももうおらんのやなあ・・・」

「さみしいもんや・・」

よくよく思えば 80 才、昔では長寿。
いつまでもコキ使っているがちょっと手加減したろかなあ。

いや、やっぱりやめとこ。
「年取っても甘えない、甘えさせない」。これうちのテーマやからね。

コキ使ったるわ！



スーパーばばあ　4

●「まいくばあ正直ィ！」のお話し。

「お金が一番大事なものではない」とおっしゃる向きがありますが、

それはとりあえず困っていない人々のいうことで、

実際は、あと少しのお金があれば、幸せになれる人のなんと多いことか・・（と思う）

そりゃ、「心の持ちようですヨ」ってのも、わかるこたぁわかりますが、

「心の持ちよう」でメシが食えていきゃあ世話ないわ。

母はよく言っています。

「わしゃやっぱりお金ほしいわ」

だよネ。

正直ィ！

【あとがき】

●金は天下の回りモノ、といいます・・・・がっ、

まいくばあに言わせると、

「まわってこん！」

そりゃそうだろうね。

なんせヤツは、

アレに（子や孫などに）コレ買うたろ。

あの人に（親戚、友人、知人）コレあげよう。

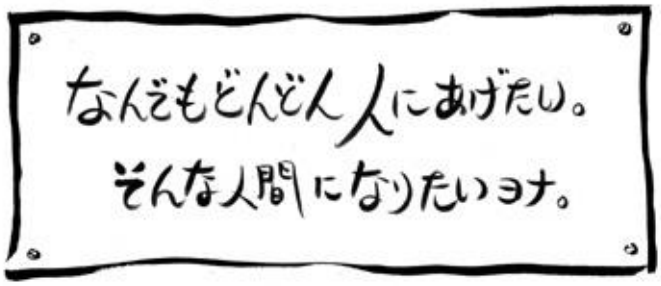
あそこに（いろいろなところ）コレもっていってあげよう。

配達に来る宅急便のお兄さんには栄養剤を、

誰かがくれば、

「あー、なんかあげるものなかったかねぇ」

そんなんだから、そりゃ、お金も出ていくわい！



スーパーばばあ　5

●我が母まいくばぁのこのところの言動はとどまる所を知らず。

放言をくり返しております。

●大阪市長の橋下さんのファンです。

テレビを見ていた時、

『おーい、ちょっと冷蔵庫のハシモトレモン取ってくれ～』

・・・ハチミツレモン、だろ。

●「あんたさあアッチ（天国）行ったら誰に会いたい？」と聞けば

『・・・・』

『そんなのおらん』

・・・ふつう、親とかきょうだいとか友達とか主人とか言わんか？

●『あした昼に寿司作って持って行くわ」と電話があった。

翌日大雨の中 10 時に歩いて持ってきた。

『昼で良かったのに。大雨止んでからでもさ。』と言えば、

『昼っていうのは 10 時までと決めとる』だって。

・・・ヤツの時間は地球時間より 2 時間くらい速いらしい。

なんせ毎朝 3 時半には起きるんだからねえ・・・

【あとがき】

●ヤツのおもしろさは今に始まったことではありません。

こんなこともありました。

むかし自動毛糸編み機が流行ったころ、昭和 40 年代？

朝起きたら、母の顔がパンパンにふくらんでいる。

小学生の僕が、「どしたん？」と聞けば

『徹夜でセーター編んだ。』

編み機は顔を下に向けて毛糸を変えながら、

手でジャージャーとハンドルを左右に動かして編んでいく機械だが、

ヤツは一晩中下を向いて一生懸命編んだようだった。

パンパンの顔で、

『ホレ、あんたのや』といってくれた。

なかなかステキなボーダー柄のセーターだったと思う。

そして、パンパンの顔で言った。

『朝めし、食うか？』

笑えてきた。

母のこと
想い出してごらんよ。

スーパーばばあ　6

●どんな夫婦でも相方が死ぬと悲しいだろうと思った。

それで父が死んだあと、毎日午後２時に母に電話を入れることにした。

もう 15 年も前の話だ。

とりたて用があるワケでなく、
毎日、「お～いどうよ？」と。

ハト時計が如くに、
毎日決まった時間に電話があるという安心感を、と思った。

１年間は毎日続けるつもりだった。

三ヶ月くらいたった頃向こうから電話があった。

「わしゃ、もういいよ～電話」

「・・・・」

「もともとわしゃ、ひとつもさみしくないんだ」

「・・・・」

「お前がしてくれるっちゅうから、してもらっていただけやし」

「えっ！？そーか？そーだったんか！」

やはりヤツは、

ココロもモンスターだったわ。

【あとがき】

●母はホントにおもろいヤツなので話題に事欠かず、このエッセイによく取り上げます。

読者の方から多くのご感想を頂くのですが、母へのものも多いのです。

「おもしろい」、「元気ですね」、「いつも大笑いしてます」、
時には、「大好きです」などと、面映く、褒められすぎなのですが、

すこしでも生活の中で、「クスッ」と笑顔になっていただく一助となるなら、
こんなうれしいことはないのです。

僕は、「まず、笑いありき」が、母からもらった最高の生き方だと思っています。

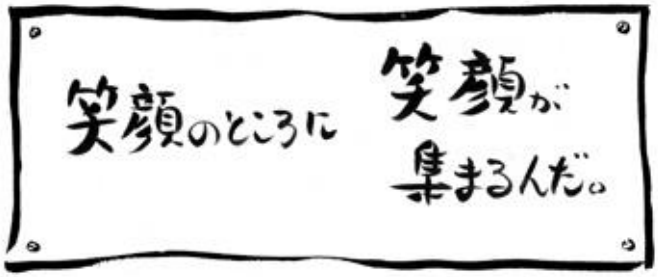
もちろん笑いどころではない場合がある。笑っていても何にも前に進まない。

それも大いに理解できます。

でも、お笑いがこれほど社会を席捲しているのは、多くのひとがそれを求めているからに他ならないと思うのです。

笑える能力をもつ動物は人間だけ。笑いは人を救う。

笑顔のもとには笑顔があつまる。ぼくは心からそう思っています。



●ぜひ、ご感想をお寄せください。メールはこちら⇒　maezawa@zb.ztv.ne.jp

第三章

「人生は味わいの旅路」

家族や友人や、

いろいろな人とのふれあい。

助けたり、助けられたり。

うれしかったり、悲しかったり。

天気も曇りも、雨も雪もある。

まるで人生は旅のようなもの。

苦い、すっぱい、辛い・・

でも、甘い、うまいもある。

この章は、そんな人生の味わいを書いてみました。

かあさんに会いにいこう

●平成 23 年 9 月 4 日の台風 12 号で大きな被害を受けた紀伊半島。

特に被害が大きかったのは半島の南端である「紀南地方」です。

小さな地方都市なので大学も無く、就職先も限られていて若者の多くは都会へ出ていく。

台風のあとには、決して少なくない人たちが地元に帰って来たようだ。
鉄道も道路も寸断された中で、いろんな手を使って帰って来たのだ。

身近にも、母の１人ぐらしを案じて浸水した家の片付けに来た 24 才の男子がいる。
仕事を休んで、車で通れる道を選び何時間もかけて走って来た。

意外と手間取る浸水の処理に、休みを２日追加して頑張って、そして帰っていったのだった。

男きょうだい３人が各地から母の元に集まって、畳を上げ、床板を洗い、乾かし、コンパネを貼り、フローリングを貼る。

それぞれが、無駄口を叩くこともなく、
ただ母さんと、その他の応援に来てくれた人たちといっしょに、黙々と家をキレイにする。

僕も自身が浸水被害を受けているので、手伝うところまでいかなくて、
ただ差し入れをもって様子を見にいったのだが、

息子たち３人が一つ屋根の下で、家をゴシゴシするさまを見て、

いつか見たコマーシャルのひと言を思い出した。
このコトバの持つ、なにやら小さい頃感じたような、あたたかい想いがよみがえってきた。

『かあさんに会いにいこう。』

【あとがき】

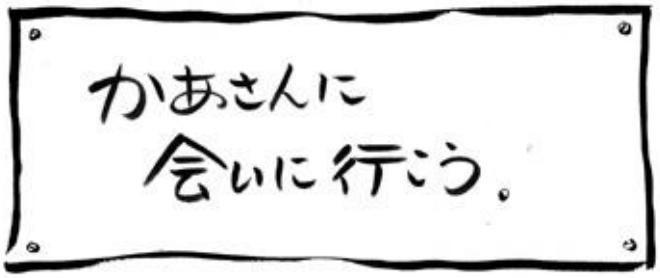
●この話しは、実は末っ子のダーリンのことなのです。

二人で帰って来てダーリンは実家へ、末っ子はうちへ手伝い、というワケです。

まあ末っ子のアキちゃんのほうは、慣れっこ浸水処理班の所属なので、
本人はそれほど奮闘しなくてもすみましたが。
（※我が家は床下浸水数回、床上２回経験済みなので・・慣れてます・・）

とまれ、こういう災害が親子の絆を深めるというのもまたひとつの事実でしょう。

「かあさんに会いにいこう。」



あにいもうと

●妹が、ガンの疑いで手術をすることになった。

夫とは 10 年前に死別し、子供がいないため、
また僕の妻は自分の母の葬儀の後始末などがあり、

さらに母はこのようなことに不案内ということもあり、
結果、僕が付き添いのため神戸に行くことになった。

完全看護なので付き添いは必要なく、僕の役目はかたわらにいてやることだった。

須磨の海に近いその病院は瀬戸内独特のやわらかい陽光が注ぐ、病室はその 4 階だった。

事前に「どっちみち大したものではありませんョ」と、
名医と評判のドクターから説明を受けていたので、
「手術が少し不安」という程度の状況だった。

だから僕の仕事は、取り留めのない話をしながら、
しかしこの年になって病を得、独り身である妹の心の不安に寄り添うことだった。

僕のエッセイ、この「キッカケコトバ」の熱心な読者である妹は、
人の生死や生き方など、僕の考えを深く理解しているので、
別段あらたなことを伝えるでもないのだが、

それでも 2 日間の付き添いのあいだ、色々な話をしたのだった。

小さいころのこと、小学生、中学生、高校生のころのこと、
大学は二人とも大阪だったがそのころの話、

そして長じて今に至るまでのこと・・・

取り留めのない、しかし二人とも経営者であるが故に共有できる人生の濃い話しも交え、

時折病室を覗く看護師も、
「いろいろお話しをされてますねぇ」と、そんなコトバを笑顔とともに漏らしていった。

手術は午後 2 時に始まり、3 時過ぎには終わった。

麻酔をされて、目が覚めて、「いよいよ手術？」と思ったら
もう終わっていたという妹の感想どおりスムーズな手術だった。

手術は成功で、ガンではなかった。(正式には病理検査待ちだが)

その報告の、切り取った患部の実物をもって説明してくれる熟練のドクターに
やわらかい西日が当たっていた。

「だいじょーぶですよぉ」

「これネ、この大きさでしたがネ、中は水が溜まってたんやネ、
それを抜いたらこんなに小さぁなったんや」

「スミからスミまで見ましたがネ、悪いところはありませんでしたョ」

「心配ない、心配ない」

噛んでふくめるように語る名医の顔が、僕には神さまに見えた。

【あとがき】

●実は、この「あにいもうと」を書こうと思ったのは、妻の母とその兄の話を聞いたからだ。

義父が 1 月 5 日に死に、あとを追うように義母が 3 月 30 日に亡くなった。

そのなくなる 2 日前、義母のもとにその兄が訪ねてきたという。

ちょうどそのとき、妻は付き添いをひととき離れていて、
二人部屋のもう片方の親族のかたが、兄の来訪のことを教えてくれたのだった。

85 才を越えた兄は、80 才の妹のベッドの傍らに座り、
小一時間のあいだ、すでに意識のない妹になにやらしきりに語りかけていたという。

「なにかささやくようにネ、ニコニコと、いろいろお話しされてましたよ・・」と
それを見ていた隣の付き添いの方が言っていたという。

義母の葬儀のとき、僕は彼に聞いてみた。

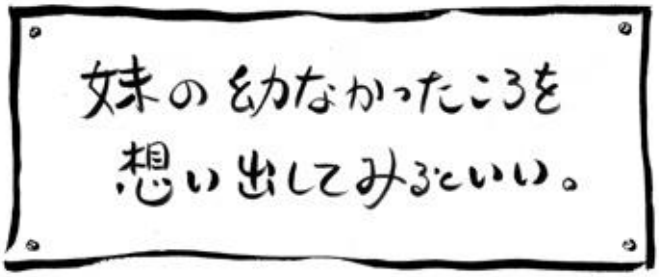
「Ｔさん、かあさんにどんなお話しをされたんですか？」

彼はそれについて言葉を発するかわりに、静かに微笑んだ。

僕にはそれが理解できる気がした。

80 年を超えた肉親の、あにいもうとのあいだというものは
永く、深いものが横たわっているのだろう。

合掌。



3 時 34 分の男

●午前１時から午前４時までは、僕の仕事のゴールデンタイムだ。

昼間は事務的なことやルーチンワーク、個人的なことに追われて本来の仕事がなかなかできない。

僕の創作（企画と執筆）は夜中が本番となる。

市街地の道路沿いの事務所とは言え、夜中のその時間はやはり静寂となる。

考えること、考えを組み立てること、書くことにその 3 時間の至福の時を充てるのだ。

仕事も終盤の、３時 34 分に決まって、

「バタムッ！」という音がする。

「おお、もう 3 時 34 分か」。

時計を見ずともすぐわかる。

彼が出社する時間なのだ。

事務所の隣の駐車場、軽トラに彼は乗り込む。

仕事は長距離の大型トラックの運転士だ。

毎日 400km 以上を走る。

聞けば、「生活と時間を正確に刻むのが大事なことなんです」と。

「きっちりと正確に進めて行くことが無事故の基礎なんです」と。

まごうことなき軌跡を刻むべき仕事に、正確さは必須条件なのだ。

休日は決まったように洗車と整備。これもまさにセオリーどおり。

プロだ。

こういう人たちに支えられて、僕らの生活は成り立っている。

ありがたいなあ。

3 時 34 分の「バタムッ！」は

僕にとっての「今日はお疲れさん！」の音であり、

彼にとっては「さあ今日もやるぞ！」の音だ。

【あとがき】

●隣の家には年老いたおばあちゃんが１人ぐらしをしている。

ある時言われた。

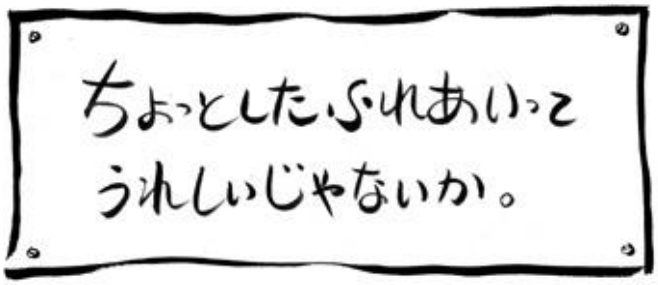
「前沢さんとこ、朝まで仕事してるやろ。」

「電気ついてるからなあ、すごく嬉しいんや。」

「トナリで起きている人がいると思うと、安心して眠れる。」

オレも意外な役に立っていた・・・

うれしかったよ。



めぐり

●夫 29 才。働き盛り、管理職。仕事はそうそう休めない。

妻 24 才。４才と２才の男の子がいる。３人目を妊娠中。

身重の妻が具合を悪くして入院しなければならなくなった。

夫は二人の子供の面倒をみなければならないが、連続して休むことができない。

自分の母親に頼む。

しかしその母も仕事を持っていて、おまけに最近手術を受けた病後の身でもある。

だから毎日頼むことはできない。

妻の母も仕事があるし、遠くに住んでいるのでこれも難しい。

やむなく夫は祖母に頼む。

この祖母は 80 才だが非常に心身元気だ。
「わかった。ワシがみてやるヨ」。

ある時は夫の母がその友達に頼んでもくれる。
「いいよ」と言ってくれる。

そうこうしていると、祖母の友だちが、
「いつでも言えよ。見てやるから」と言ってくれる。

まったく、ヒトはヒトに助けられる。

めぐりめぐってヒトに助けられる。

困った時はヒトに助けてもらおう。
「助けてください」と頼んでみよう。

かならず助けてくれるヒトがいる。

自分もどんどんヒトを助けよう。
お手伝いしよう。
力になろう。

ヒトのチカラは、
順ぐりに、
巡り巡って、また巡ってくる。

人の世とは本来そういうものだ。

【あとがき】

●どんな時代でも、
人は一人では生きられない。

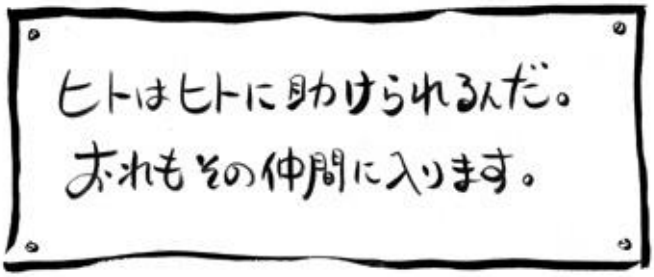
どんどん人を助けよう。
どんどん声をかけよう。
どんどん手伝おう。
どんどん・・・

運命は巡るもの。

巡る運命の、
その渦は、
自分からどんどん巻いていこう。

その渦がすこしでも、

助けてほしい人に届きますように！！



受け月

●3 月 27 日、
いつも夜遅く歩くのだが、その日は 7 時半ごろ街歩きに出かけた。

夕飯の買い物をしての帰り、
澄んだ春の空を見れば、西に空高く大振りの三日月が出ていた。

ふと「受け月」を思い出した。

伊集院静氏の小説の題名だが、

受け月に願い事をすると皿に水がたまるように
願い事が叶うのだと、という表現があったのだった。

願いごとかぁ・・・

いくつものことを僕は思い出していた。

新宮には火祭りで知られる神倉神社がある。
歩きの途上で神倉山の山腹に遠く見ることができるのだが、
道路からそこに向かって一生懸命にお祈りをしている女の人をよく見かけた。

たくさんの人が行き交うなか、彼女は何かを一心に祈っていた。

今は見ないが願いは叶ったのだろうか。

友人は、弟さんがガンの手術をしなければならなくなったとき、
毎夜神社にお祈りを続けたと聞いた。

弟さんは完治し、今元気にしているようだ。

僕は高校生のころ新聞配達のアルバイトをしていたのだが、
せまい路地に祀られている早朝の地蔵様に、何かを祈る老婆をよく見かけた。

朝霧の中、その姿は神々しくもあった。

人は祈る。

それはたぶん、
お金がたまりますようにとか、もっと何かいいことが、というプラスの願いよりも、

病気が治りますようにとか、どうか家庭に平和が訪れますようにというような
マイナスからスタートするものが多いのではないのだろうか。

欲のお祈りなど、なんら美しくもなくむしろ醜い。
祈りの姿が美しいのは、自分を忘れて他のために祈るからではないか。

そんなことを思った。

人は、

人のために、

祈る。

【あとがき】

●そんなことを考えていて、

僕は三日月に祈ることを忘れた。

ほんとは、

被災された方々の安寧をお祈りすべきだったのに・・

おれはバカだよ。

十五夜

●台風 17 号が去った 9 月 30 日夜、

空は高く、雲は残っているにせよ夜中に青空が見えるほどの、11 時を過ぎたころ。

歩きに外に出ればまん丸のお月様が、

見事な円をくっきり誇示するかのように光っている。

きょうは十五夜だった。

家人は今宵仲間とともに月見の宴を催すつもりが、

あいにくの台風の襲来となり中止となったのだったが、

まさに夜半僥倖の月となった。

それを性別に分けるなら、迷わず女性と言いたいほどの月は

柔らかなあざやかな、あでやかな光を上空高く放っている。

風とともにおしよせる雲さえ、今宵の彼女の邪魔はできない。

僕が小さい頃、昭和30年代後半か、

ふるさとでは十五夜になると子供たちが地家（じげ）の家々を、

口々に「たばらしてー」と言ってまわるのだ。
　　（賜らしてという意味の雅語のようす）

お月様へのお供えのまんじゅうやらお菓子やらを貰って巡るそれは年中行事だから、

村の人々もこの日は押し寄せるチビたちのために、

すすきやお供えダンゴと共に、縁側やら庭先に壇をしつらえて待つのだ。

僕たちが狭い村中をひととおりまわって我が家に帰る頃には

いっぱいのお供えを賜ったものが両手に重い。

いまも脳裏に、月影の子達の満足の顔が偲ばれてくる。

今はそんな風習とて遠い昔か。

月を眺めることが生活の一部になっていた優雅な時代。

そんな日本の古き良き時代を想った夜だった。

【あとがき】

●田舎で生まれて育ったありがたさが、いま身に沁みる。

月を眺めることが生活の一部など、

なんとゆったりとした時代だったのだろう。

けっして今のように便利ではなく、

モノが溢れる時代ではなかったが、

そこにはにんげんの息づかい、

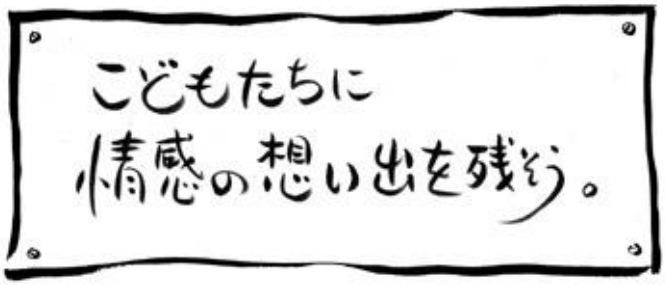
にんげん同士のナマなつきあい、

村落の連帯感、そしてあったかみに溢れていた。

子供たちや、そのまた子供たちに、

そんな優雅を味あわせてあげたいと思う。

折に触れて昔のことを書いていきます。



父娘　1

●義父が亡くなった。85 歳だった。

妻は大の「おとうちゃんっ子」だ。

義父は自分が男兄弟ばかりで、おまけに母親を幼い頃亡くしているので、

妻が長男に続いて産まれたときは「女の子ができた！」踊躍歓喜したという。

中学生のころ、体が弱く入院した娘を見舞うために、

林業の仕事が終わってからどんなに遅くなっても

カブを飛ばして病院に毎日顔を見せた。

その後反抗期のころは、「きびしいおとうちゃん」と

少し距離を置く時期もあったがそれもひとときのこと。

涙など見せたこともなかった父が、

娘の結婚式には人目憚ることなく涙を流した。

それを見て、娘も泣いた。

8 人の孫に恵まれ、ひ孫もうまれたころ、

80 過ぎには脳出血の後遺症で少しマヒの残るからだとなった。

その中でも、認知症の伴侶を自宅でつきっきりで見ていた。

そんな老々介護を支えたのが妻とその弟で、

中でも唯一の女手であった妻は、

介護をする父を支援する娘としてよく尽くしていた。

ある時、妻と父が、桜の話しを始めた。

「井戸川の桜は、ねゃ」・・・

ひとときその話しを聞いていたが、用のあった僕は出かけなければならなかった。

一時間くらいして帰ると、

二人は縁側で、同じ話しをしていた。

「一時間の、桜の話し」。

僕には推しはかることのできない、

しかし素晴しい濃密な時間が父と娘に流れていたことだろう。

妻よ、人にはかならず終わりがある。
それは誰とておなじこと。

我々が銘すべきは、いつどこで、どのような病気で亡くなったにせよ、
素晴しい時間を共有できた幸せなのだ。

それこそがいちばんにだいじなことなのだ。

その人の娘に生まれ、

その人の娘として生きて

そして、最愛のおとうちゃんを送る。

最高の父娘だと、僕は心に刻む。

たぶんまちがいなく、

あの世というところで、

幼きころ死別した母と会っていることだろう。

キミそっくりの。

【あとがき】

●書きながら、

自分で感動してしまった。

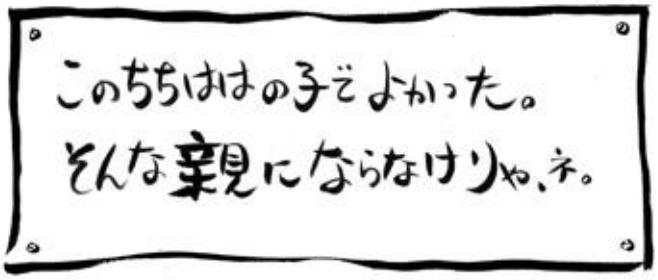
それほどにもすばらしい父と娘だった。

こういう人たちと

同じ時代、同じ人生を共有できたのは

僕の誇りでもあります。

合掌。



父娘　2

●義父が死んで、もう 20 日あまりになる。

妻は四十九日までは、実家で何かとまつりごとをしている。

四十九日の間は毎日墓に灯をともしに行く、
毎日お膳を供するなど田舎のしきたりがあり、
また妻もそのおこないを通じて亡き父との時間を過ごしているようだ。

告別式が終わってしばらく経つのに、弔問のお客様が続く。

来てくださる方々が同じことを言う。

「〇〇〇さんには、たいへんお世話になった」

娘の知らない父は、あちこちに喜びの種をまいていたようだ。

実は僕は通夜で親族代表のあいさつをしたのだった。

もともと生前から、
「俺が死んだら、これまでお世話になった皆様にしっかりとお礼を言ってくれ。頼む」
といわれていた。

ずっと祭壇の正面を向いていた僕が、あいさつのため会葬者の方を向いたとき
会場は埋め尽くされた方々でいっぱいだった。

僕はおひとりおひとりにお礼を言うつもりで、いつもの早口は封印して、
ゆっくりゆっくりと、まるで自分に語るように言葉を噛み締めながら話した。

会場からはすすり泣く声が聞こえていた。

壇上の遺影には、成人式の晴れ着を着た孫娘と、
自分の妻と三人が揃った写真から取った笑顔があった。

父が脳出血の後遺症で半身が少し不自由になってからは、妻が週に一度実家に行っていた。
買い物にスーパーに行くとあちこちで知人に声をかけられたそうだ。

「お父ちゃんに声をかけてくれる人の多いのにびっくりした」。

娘は何十年ぶりに、ほんとうの父の姿を知った。

なくなる最後の２年、３年は、神様が父と娘に与えてくれた最高のプレゼントだった。

『人が死んで残るものは、
　その人が貯めたものではなく、
　人に与えたものだ』という。

彼は、
実にたくさんの『ありがとう』を、
僕たちに残して行った。

【あとがき】

●スーパーで、父と娘がカートを押して買物をしている姿を見た僕のいとこが
電話してきたことがあった。

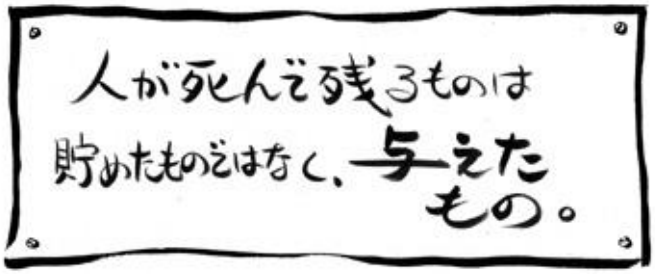
「のりちゃん、お父さんとスーパーで買い物してたわ。
おとうさん、すごくうれしそうにしていたよ。
見ているこっちまであったかくなってきた。
のりちゃん親孝行だよ」。

聞いている僕までがほんとうにうれしくなってきた。

１月１５日、妻と伊勢志摩へドライブにいった。
少し気持ちを休ませてあげようと。

鳥羽パールロードという、伊勢湾を眺めながら山を越える道。

助手席の妻が父の写真を胸にして
「おとうちゃん、ここ鳥羽の海やわ。来たかったやろ」と
小声で語りかけているのを、僕は運転しながら聞いていた。



僧医

●2012 年 5 月 17 日朝日新聞「ひと」欄より。

宮村通典(みやむらみちのり）さんという医師がいる。66 才。
僧侶でもある。

長崎県大村市で医院を開業していたが、
3.11 震災後、「今一番すべきことは何か」と自ら問い直した。

９月に被災地を訪れ、
「これは長期戦だ。町民になるしかない」と決めて、
看護師である奥様とともに移住を決め、
被災地である岩手県の県立大槌病院に赴任した。

毎朝、震災の犠牲者を弔うお経をあげて病院に向かうという。

ああ、こういう人がいる。

ありがたい。

ありがたい。

ありがたいなあ。

ありがとうございます。

ありがとうございます。

【あとがき】

●使い古された言葉だが、「人間ってすばらしい」と、心底思う。

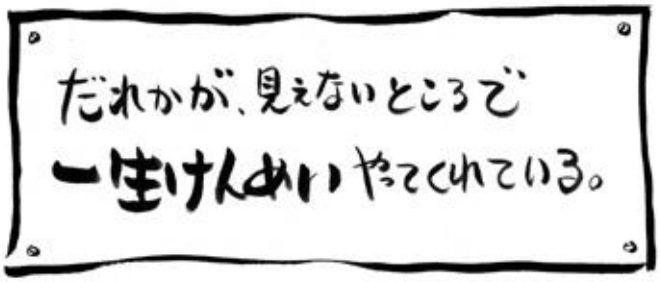
被災地に対して、被災された方々に対して
何かしたいと「思う」ことと、「実際にする！」ことは決定的に異なる。

「思うこと」なんて、頭の作業だもんね。

オレもそっちのほうだよ。

お礼を申し上げることしか今はできていない。

すみません。ありがとうございます。



義弟

●きょう、10 月 24 日は義弟タケシくんの命日だ。

平成 13 年に亡くなったから、もう 11 年になる。

大手クレーン会社の腕利き営業マンだったが、若くして旅立った。

酒が好きで好きで好きでネ・・・

子供はいなかったのだが、妻と愛犬を宝にしたいいオトコだった。

兵庫県は明石の海沿いのマンションに住み、

うちの子供たちが夏休みや春休み、
または家出先としていつでも自由に出入りできたのは、
彼のフトコロの大きさがそれを許してくれたからだった。

何も言わないオトコだったが、
子供たちは、
「ハシモトくん、ハシモトくん」と、とても懐いた。

彼の家はうちの子供たちだけでなく、
イトコの予備校通学のための宿舎になったり、
さまざまな縁の子供たちがなだれこんでいた。

誰が来ても彼はいつも静かだった。
ニコニコと酒を飲んでいた。

平成 7 年 1 月 17 日、阪神・淡路大震災の時、
ちょうど長女が家出中で長逗留していたのだが、

その日の午前 5 時 46 分、大きな震動が襲った時、
彼はとっさに長女に覆いかぶさって守ってくれたという。

古寺と盆栽を好んだ。

法事で菩提寺の寺門をじっと見つめていた彼に、

「どうよこの門は？」と訊けば、

「・・・・・」

「古い」。

（・・・そりゃ誰が見てもわかるわい！）

出張ついでに義母（僕の母ですが）の所に来ては、
大いにビールを飲み、愉快に笑って泊まっていくこともあった。

そんな義理の息子を、
「あの子はまったく大酒飲みじゃ！」と
冷蔵庫にビールをいっぱいにする母だった。

彼は 10 月 22 日に脳出血で倒れ、
２日後、10 月 24 日不帰の人となった。

その知らせを受けて、はるか遠方の営業所から飛んできた同期入社の親友が、
彼の棺のかたわらで１時間も正座したまま嗚咽していたことを想い出す。

亡くなってしばらくして妹宅を訪ねると、
主をなくした盆栽がさみしく木枯らしに吹かれていた。

とてもやさしい、いいオトコだった。

ありがとうタケシくん。

【あとがき】

●彼は僕の母のことをとても気に入ってくれていた。

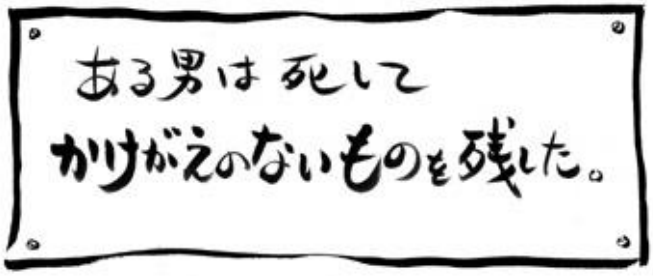
「ミエコさん、ミエコさん」と呼んでいた。

彼の死後、妹は彼の遺産で母の家を建ててくれた。

母の家には、だから表札が二つある。

母の名前と、もうひとつ、

「橋本毅」と。



たからもの

●糸井重里さんの名言に、

「思い出したら、思い出になった」というコトバがある。

忘れてしまっているものは思い出にはならない。

心によみがえってきたそれを想ったとき、

それは思い出というたからものにかわる。

そんなたからものさがしてみませんか？

物心ついた頃から、小学生、中学生、高校生・・

そして今まで。

忘れてしまっている

だいじなこと

だいじなもの

だいじな人はいませんか。

ちちはは、おじいちゃんおばあちゃん、

きょうだい、おじおば、いとこ、しんせきのひとびと、

近所のひと、せんせい、職場のひとびと、

そしてともだち・・

だいじなひと

わすれていませんか。

思い出して、

思い出というたからものをつくりませんか。

【あとがき】

●義父が亡くなって、古いアルバムを見せてもらった。

そこには僕の知らない小さいころの妻がいた。

あっ、こういう子だったんだ・・・

意外なたからものに出会った気がした。

自分の小さいころのアルバムなんてもう何十年も見てなくて、その機会に見てみた。

ばあちゃんと写った写真があった。

豪傑と呼ばれたばあちゃんが満面の笑顔でそこにいた。

ああ、ぼくはかわいがられたのだった。

またひとつたからものがふえた。

●ぜひ、ご感想をお寄せください。メールはこちら⇒　maezawa@zb.ztv.ne.jp

第四章

「いまを乗り切るヒント」

人生には、

遅すぎるものなど、なにひとつない。

たったひとつの言葉が

自分を助けてくれることがある。

この章では、

今を乗り切っていく言葉を

集めてみました。

底には肥やしがある

●「きょうの名言」というメルマガは含蓄に満ちた古今東西の名言を紹介してくれます。

その中にこういう一文がありました。

(以下引用)

『成長は一生かかって行う仕事。
谷間に沈んでいるときこそ、一番成長できる。
そこには肥やしがあるのだから。』　　バーバラ・ジョンソン

（ここまで引用）

生きて行く過程ではいくつもの渦があって、
ヒトはいつでも「苦」とか「試練」という渦に巻き込まれながら生きている。

やっとひとつの渦から浮上したと思ったら、また次の渦が待ち構えていて・・・
その繰り返しが人生ってもんだ。

子供やってても、大人やってても、
働いていても、家事していても、何もしてなくてもさ、

人間関係だの、病気だの、お金だの、愛情だの、
もちろんイジメという苦難もある。

浅い渦もあればときには命に関わるような渦もある。

いつまで続くのだ！と思うような、長〜い渦だってある。

ヒトは辛いときはそんな底なしの思いにとらわれることも多いだろう。

でも、上の名言にあるではないか。

『谷間に沈んでいるときこそ、一番成長できる。
そこには肥やしがあるのだから』

底ほど、深いほど、肥やしも濃いんだよ。

その肥やしを思いっきりもらおう。

むしろ「トクだぜ〜！」と考えられたら最高だ！

正岡子規は 34 才で亡くなった俳人で、

結核で死の数年前から寝たきりの生活になった。

しかしその頃の作品には、やがて死が来ることわかっていながらも

何ら暗い影がないと言われる。

僕が高校生の頃、恩師浜畑栄造老師が国語の授業で

その頃の子規について、こう教えてくれた。

『子規はなァ、

寝たきりの部屋のなァ、

そのわずかな障子のスキマから見える庭になァ、

全宇宙を見たんじゃ。

彼は身体は寝たきりじゃったが、

その心はなァ、

広々と大空を飛び回ってなァ、

躍動感のあるすばらしい句を残したんじゃ。

お前らもなァ、

子規の作品だけでなく、その生き方を学ぶんじゃ』

子規は死を迎える病床においてさえ、

その環境を最高の肥やしにした。

【あとがき】

●きょう書いた浜畑栄造先生は、

僕の高校の国語の先生で郷土史家でもありました。

「アカシアの大連」で芥川賞をとった清岡卓行さんの縁のひとでもあり、

文学に深い造詣を持った大人でありました。

僕に人生の道しるべを示してくれた恩師であります。

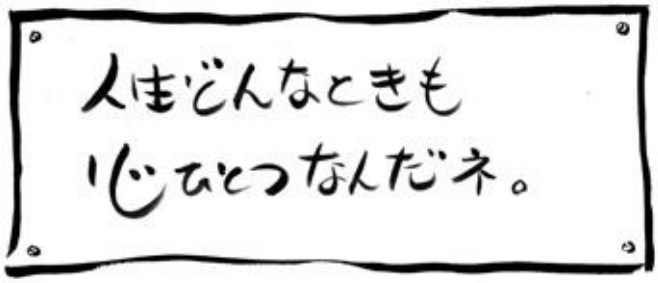
「人生に必要なのは、バックボーンじゃ」

「おまえらはそれを探しに旅に出る。それが人生じゃ」

「ワシのバックボーンは儒教じゃ」

「励めよ」

僕の心の深い所に生きています。



覚悟

●知人にとても優しい人がいる。

親を世話するために東京から南紀州へUターンしてきたのだ。

彼女は、夫の親のみならず知人のお世話もすることになった。

そんな優しい人だ。

僕は問うたことがある。

「そこまで、なかなか並大抵じゃ出来ませんよねえ・・」

彼女は答えた。

「私は何もかも背負い込んでしまう性格で、それが自分を苦しめて、ほんとに辛かったんです」。

「でもある時、『自分はそういう人間なんだ。これで行こう』と覚悟を決めたの」。

「そしたら、気持ちがそっちへ向いたみたい」。

・・・・覚悟。

たしかマザーテレサさんのこんな言葉を読んだことがある。

「自分のすべての力を、他のために尽くしなさい」。

【あとがき】

●「覚悟」なんていう言葉、最近しばらく聞いた記憶がない・・・

しかし、なんと潔い言葉だ。

凛として立つ、という気品が伝わってくるではないか。

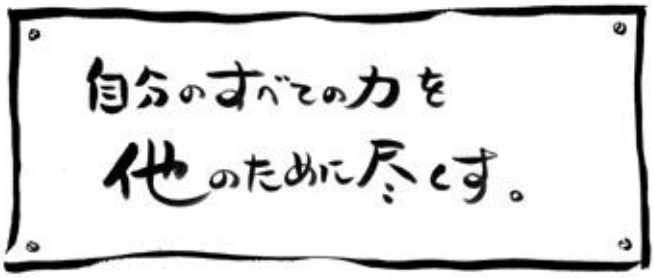
辞書を引けば、「きたるべき、つらい事態を避けられないものとして、あきらめること。

観念すること」とある。

また仏教用語として、「迷いを脱し、真理を悟ること」とある。

最強だ。「覚悟」という言葉ほど強いものはない。

人は、覚悟を決めれば怖いものなどなくなるのだ。



スタート

●いま、いるところがスタート地点。

いま、おカネがない人は、「おカネがないよ。」というところからのスタート。

いま、誰かとモメている人は、「いま、モメているんです。」というところからのスタート。

いま、病気で苦しんでいる人は、「おれは病気で苦しいよ。」というところからのスタート。

いま、さみしい人は、「わたしはさみしい・・・」というところからのスタート。

●いま、どうしようも無いと思っている方・・・

「どうしようもない」は終わりではなく、

「どうしようもない」という「そんな場所」からのスタートと考えてはいかがでしょうか？

それがハンパじゃないことは、僕も経験している分わかります。

でもそこは感情でなく、理性で冷静に考えてみると、

「どうしようもない」という「ところ」からのスタートということになりませんかね。

●いま立っているその半畳からスタート。

いま寝ているその一畳からスタート。

もともと人間は、立って半畳、寝て一畳。

もともと、コンパクトな無一物のものなんです。

●さあて、ここは気持ちを切り替えて、

「今いるところ」からのスタートとしましょうぜ！

【あとがき】

●「今いるところから、スタート！」なんて、

わかったような、えらそうなことを、言ってしまいました。

僕はじゅうぶん本気なのですが、「分かってないなぁ・・」と思われるかも・・

そのときは、ゴメンね。

みっちゃん最高！

●母の友達、みっちゃん。

80 才くらい。大柄ですこぶる元気。毎日自転車で走り回っている。

浜筋に住む。豪傑のみっちゃんは世話好き。

亡き夫の兄弟の介護、面倒を見るのみならず、知り合いに毎日食事を作り届ける。
のみならず、ワケありビトの身元引受人になり、ヤサグレたちにメシを食わせ世話をする。

年金ぐらしでいっぱいいっぱいのはずなのに、
自分の事はそっちのけで、とにかく人の世話をする。

山へ分け入り山菜を採り、タケノコを掘る。
それを近所、友達に配る。
もちろん僕もそのご相判にあずかることになる。

みっちゃんは数年前脳出血で大手術をしたのだが、ちっとも怖がらない。
医師に「ムリしないように」言われても、
「そんなんやったら死んだほうがいいわい」と豪快に笑う。

「シンジくーん、またたのむわ」と言って、
年金関係やら、役所へ出す資料作りを僕のところへ持ってくる。
だいたいオレのこと「シンジくーん」なんてヤツは、このみっちゃん以外ひとりもおらん。

いつも何かをくれる。
山菜だったりお菓子だったり、コーヒーだったり。
「いつもすまんね」って。

みっちゃん、元気をもらっているのはオレのほうだよ。
お礼を言うのはこっちだ。

母とは昔木材工場で長い間同僚だった。
そこが倒産してからも「木場の仲間」の縁は濃い。

80 才の二人の会話はたぶん老婆のそれでなく、具体的だ。

「あの山のどこそこで、ワラビがとれる」
「どこそこの店のナントカがうまい」
「あの店のアレが安い」
「自転車で〇〇へ行って来た」
「あの〇〇さん（どこかのおっちゃんらしい）トロいわ！」

病気の話しなどなにもしない。
弾力に富んだ会話が続く。

みっちゃんも母も、「まず、他ありき」だ。

人のために何かをするのが自分の仕事、と身についているようだ。

人のために・・・・

しかし、結局、僕から見るとこの二人ほど、
人のために尽くしながら、「自分の人生を生きている人」は知らない。

人生の終盤でこんなにパワフルに、人のために生きることができる。

みっちゃん最高！（ついでに母もネ。）

【あとがき】

●実はみっちゃんの娘のタカコちゃんは僕の教え子（？）だ。

僕が 25 才の頃みっちゃんに頼まれた。

「シンジくーん、タカコの英語みてやってくれん？」

「いいよ。」

まあ、学生時代やっていた家庭教師のつもりだった。

約束した始めての日、みっちゃんの家に行くと

アレレ？

四人の中学三年生の女の子たちが待っていた。

「シンジくーん、ついでにこの子らも見たって」

「・・・・っおお、いいよ」

みっちゃんが集めてきていたのだった。
みっちゃんとはそういう人だ。

最高だ。

※四人とも高校受験に合格しました！この子たちにとってはオレは「センセー」で、
今でも街で会うと「マエザワセンセー！」って呼ばれる。

いいもんですヨ。

ストップ！自分責め

●事務所の外で子犬の鳴き声がするので出て見ると、
それは自転車に乗ったおばちゃんが、
大声で自分を（又は誰かを)責める声だった。

何と言っているのかは判らなかったのだが、
その身振りや顔つき、声の調子で、「誰かを責めている」ように見えた。

ほっぺたを自分でパチパチ叩きながら
国道沿いを何回も行き来している老婆を見たこともある。

聞けば認知症による徘徊だという。
もと中学校の先生だったらしい。

何かの、とても辛いことが積み重なって自分の容量をオーバーしてしまったんだろうネ・・

思うに、「自分を責めるのがいちばん手短か」なんですヨ。

ひとを責めてもしょうがない。
世の中、社会を恨んでも詮無きことと、
「自分が悪いんだ」
「もうちょっとしっかりしていれば」
「もすこし、アレだったら」

自分だったらいくらでも責められる・・・

でもね。

自分を責めることは、一見自分を厳しく律しているようで、

実はそこに逃げてしまっているのかも知れません。

きびしい言い方になってしまいますが、自分を責めてもそれこそ詮無きこと。

こんなこと言ったらアレだけど、オレは自分がそうだから体験的にそう思うんだ。

だから、オレがいつも自戒しているのは、

自分を含めて、「すべてを赦す」こと。

「責める」ところからはなんら喜びは生まれない。

「赦す」ところからこそ、何もかもが始まる、生まれるものと思っています。

赦す姿は美しい。

赦せる人になりたいんです、俺も。

【あとがき】

●責任感が強い人間は自分を責める。

でも、責任感の矛先を、自分を責めるところに向けるよりは、

まず解決に向けて、思い切ってかじを切ろうよ！

オレは、まず、

自分を、赦すことから始めたらいいと思うんです。

そこからはじめようよ。

自分を責めちゃいかん。自分をいじめても、何の解決にもならんよ。

だれも喜びやしません。

人生はグレー

●人生には、それはそれは色々な問題があります。

どんな人にもある。外から見えないだけです。

しかしながら、人生の問題に白黒がスッキリつくことは多くない。

こっちの都合と、相手(人だけでなく、すべてのこと)の都合がまるで違いますからねぇ・・

で、グレーのまま、ということになりがちです。

でしょ？

ドンキホーテという大手小売業の社長、安田さんがこんなことを言っています。

『経営は、すぐ出る答えばかりではない。解答がないものがある。
むしろ「どちらかを選ぶ」などと言うほうが危険である。』

その場合、「放っておく」というよりは、「答えを出さない」のだ、と。

また 100 円均一で有名な、ダイソーの矢野社長もこう言っているらしい。

『昼食のメニューもよう決めん人間なのに(自分が)、決断力などあるはずがない。』

どちらも年商 3000 億以上の社長がですよ・・・

人間、誰でもみなそうなんですよネ。なんでもスッパリキッチリ決められるもんじゃない。

グレー、灰色のままで上等じゃないですかネ。

【あとがき】

●人の分だけ解釈があります。

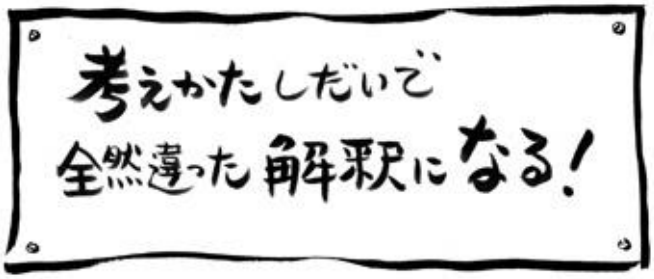
放っておくのでなく、結論を出さないだけだ、なんてうまいこと言いますよねぇ。

おなじ現実を与えられても、それに対する個人の考え方しだいで全然違った解釈になる。

『考え方』。これこそ最高の解決方法じゃありませんかネ。

頭をやわらかくして、いろいろ考えてみたいものです。

きっと自分の『解釈』が見つかります。



平気で生きていこう

●ある僧が言ったことを思い出す。

『悟りとは、死ぬのが怖くなくなることかと思っていたら

実は平気で生ききることじゃった。』

平気で生き抜いていこう。

たかが我が人生。されど我が人生、だ。

【長いあとがき】

●いま、やむなく中途で生をあきらめ、自ら人生を終えることを選ぶ人が年間 3 万人もいます。

キレイごとや理想論をいくら語っても始まらない。コトバで救えるものでもない。

救えるなら 10 年以上も続けて、毎年 3 万人もがその道を選びはしません。

途中で生きるのをあきらめた人が「敗者」と呼ばれる所以などない。

そもそも人生に「敗者」など存在しない。

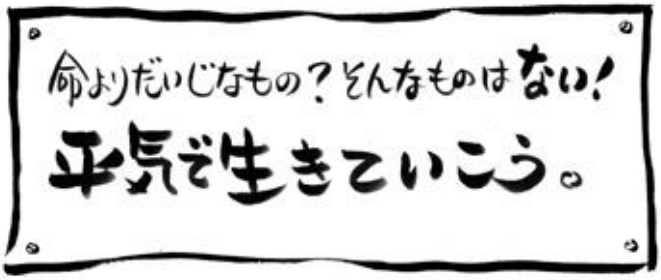
何人たりとも、違わぬ、尊厳の目で見られるべきです。

命はだいじなもの。いちばんだいじな掛け替えのないもの。

それにくらぶりゃぁ、他はとるに足りぬよ。

だいじにしてください。頼みます。

平気で生きていこう。オレもそうします。



大人　たいじん

●松井秀喜選手がメジャーに昇格しました！（少し古いニュースですが）

開幕からなんと２ヶ月遅れてしまいましたが、
５月 29 日タンパベイ・レイズのメジャーリーガーとなったのです。

絶頂期で日本の巨人軍からニューヨークヤンキースに入団して、
４番を打つなど活躍しましたが、ケガや年令からくる衰えもあり、
ここ数年は移籍を繰り返していました。

特に今年は 10 年目の節目で、
その行方を多くの人々が見守っていたわけです。

なかなか決まらない中でも、
松井のメディアのインタビューに対する態度は一貫していました。

『決まるまでは自分のできること、
　　しっかりトレーニングを重ねるだけです。』

『自分がコントロールできないことには悩んでも仕方がない。
　　移籍に関しては全て代理人に任せています。』

松井選手の試合後のインタビューを聞くと彼はいつでも冷静です。

感情をあらわにせず、しかし誠実にインタビューに応えるさまは
まさに「ジェントルマン」を彷彿とさせます。

気のきいたことなどほとんど言いませんが、
彼の言動は非常に清々しく、
その大人（たいじん）たる印象はずっと心に残ります。

大人（たいじん）とは、
落ち着いていて、動ぜず、自然体で冷静に判断できる人。

さらに彼については、
まさに、「松（待つ）井」と思えるくらい、
「待てる人」であると強く感じました。

マツイヒデキ、大人であります。

【あとがき】

●うちの母は松井選手のファンです。

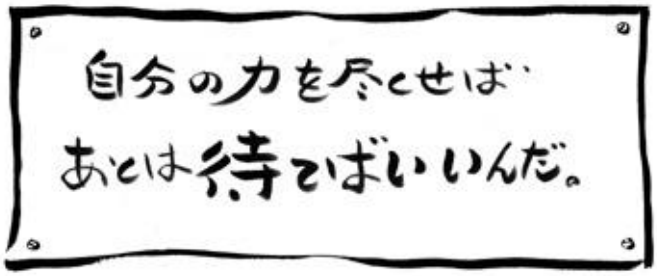
たった一言しか言いませんが。

「あれは、いい」と。

たぶんそれが彼を表現するすべて。

僕もそう思う。

「あれは、いい」。



小さなひかり

●「復興」、「絆」、「がんばろう」・・・

あまりに使われすぎて、ツルツルになってしまったコトバたち。

そんなことを、ニュースステーションで古館キャスターが語っていた。

あの日から一年、
キッカケコトバというメルマガを書き続けている僕は
「コトバ」の力をまだ実感できないでいる。

つるつるになった言葉など、使いたくもない。

人々の心を打ち砕くほどの大災害の前では
言葉など何の足しにもなりゃしない、とも思うことがある。

そもそもそのコトバは、
被災されたかたがたを少しでもなぐさめたい、元気づけたいという、
表向きの理由とはうらはらに、
自分の心の落ち着き先を探っているだけかもしれないのだ。

報道を見る限り復興の光は全然見えてない。
いまのこの国じたいに１本の柱が立っていないのだから、半分は人災みたいなものだ。

でも・・・

根拠などないのだが、
僕にはいまほんの小さな、心もとないほどほのかだが
しかし、チラッ、チラッと光が見える気がする。

いや感じている。

ヒトの本能とでもいうべきものなのだろうか、

なんだか、
「国もアテにならねぇ。もう、しょうがねぇなぁ。オレたちでやるしかねぇか・・」

・・・・そんなココロを感じるのだ。

（無責任な感覚でのもの言いをお許しください・・・）

一年前、僕は自分ができることは何かを考えて、
３月 31 日に、ふたつのことを決めたのだった。

ひとつは、
コトバの力を信じて、オレは書き続けるということ。

もうひとつは、まいにち約１時間、
亡くなったかたがたのご冥福と、被災されたかたがたの心の安寧を願って
お祈りをするということだ。

誓いをたててもうすぐ一年がくる。

僕はいま、そしてこれからも、

自分が感じる、「ちいさなひかり」を信じて、

こころの大応援を、やっていきます。

※本文は震災からほぼ一年後、2012 年 3 月 14 日のメルマガに書いたものです。

【あとがき】

●新聞もテレビも、被災された方々の現状を伝えてくれている。

だから現地に行ったことがない僕でも、まるでそこにいるように感じることができる。

ただ、被災されたかたは数十万人に上る。
マスコミで取り上げたところで、せいぜい一万人くらいのものだろう。

声無き声の、圧倒的な数の方々が存在するのだ。

その方々の中には報道されるより悲惨な現状を送っておられるかたもいるだろうし、

また、肉親を失うという最大の悲しみを負いながらも
一歩を踏み出したかたも、じつはたくさんいると思う。

一年の長さは傷を癒すにはとても短いものだが

春、夏、秋、そして厳しい冬を経て
今また二度目の春が来て、
その季節のうつろいが、ヒトの心をすこしだけゆるやかにしてくれれば・・と思うのだ。

ヒトは本能的に、生きることを求めている。

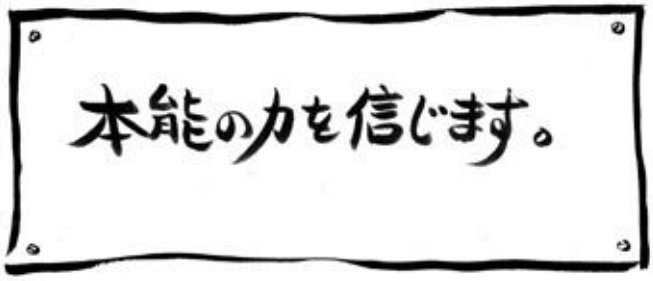
腹が減れば飯を食う。

眠たくなれば起きて居れない。

被災もしていないのにまこと無責任な物言いですが、

その本能の力を信じたい。

オレも精いっぱい応援するからね！



遅すぎるものなどない

●きょうのキッカケコトバは、ひとことです。

「人生に、『おそすぎる』ものなんか、なにひとつない。」

英語にもこういうものがあります。

イッツ　ネバー　ツー　レイト

（遅すぎる、というものはない）

古今東西を問わず、「おそすぎる」ものなどないのです。

●いまからです。

【あとがき】

●こんな言葉もありました。

『人生には、』

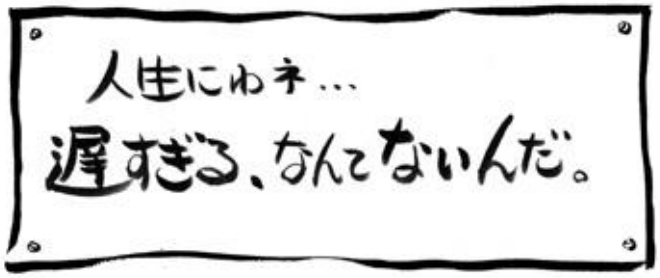
『乗り遅れを心配しなければならないようなバスはない。』

つまりは、

あわてなくても、焦らなくてもいいから、

自分がいまできることをやっていく。

それに尽きるんだと思います。



●ぜひ、ご感想をお寄せください。メールはこちら⇒　maezawa@zb.ztv.ne.jp

第五章

「明日への一歩」

わたしたちは生きている。

生かされている。

人生には、遠回りなんかない。

いつでも、いまがはじまり。

さあ、明日に向かって

ごいっしょしましょう。

那智山へ歩く

●10 月 21 日、日曜日。

ＪＲ那智駅に車を置いて、そこから那智山を目指して歩いた。

日本一の名瀑那智の滝を擁する世界遺産の地でもある那智山は、

国道沿いの駅から山へ向かって約７キロメートル。

僕たち夫婦はテクテクと長歩きをスタートした。

この一帯は昨年９月４日の台風 12 号の大水害を蒙った地域で、
僕はこの一年余り、なぜかここを訪れることができなかったのだった。

歩を進める。

ススキが光る県道沿いの日ざしはあたたかく、風は心地よい。

濁流に侵された家々や土石は撤去されて新築が進んでいる。

しかし眼下の那智川におりてみれば、

山から濁流とともに流れ来たおびただしい石がその被害の大きさを物語っている。

歩を進めると、やがて最大の被害が出た市野々(いちのの)地区へ入る。

道路の一角に慰霊碑が建立されており、物故者の名が刻まれている。

深く頭を垂れ、鎮魂を祈る。

これをしたかったのだ。

一年、どうしても来ることができず、

しかし、今日ここに来たのはこのためだったのだ。

その敷地の脇に１本のポールが立っていて、
最上部に「台風 12 号最高水位 3,550ｍｍ」と表示がある。

なんと路面から３メートル 55 センチ水かさが上がったのだ。

建物の二階部分にまで濁流が押し寄せた。

その恐怖は、いかばかりだったか。

亡くなられた方々の無念を心に刻んだ。

【あとがき】

●復興が進んでいる。

道路、建物などのハードは復旧できても、亡くなったかたがたは戻ってこない。

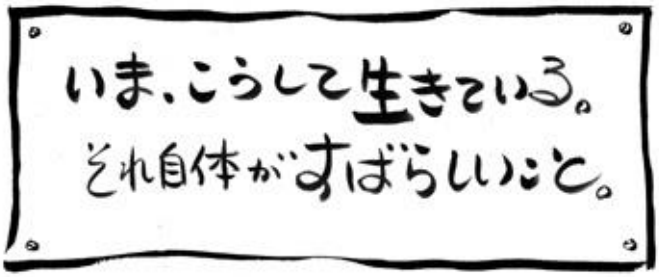
道すがら、

おばあさんが庭の手入れをしている。

若いお母さんが洗濯ものを干している。

小学生の女の子たちがボールあそびをしている。

何げない日常の、なんと貴重な、だいじな、愛おしいことか。



永訣

●歌手の加藤登紀子さんのコトバ。

『究極のラブソングとは、
死別した人への思いだとわかったんです』。

●夫を亡くして、ほんとうのサヨナラを言うのに２年かかった、という。

自分のけじめとして、

「帆をあげて」という歌で、

『帆をあげて前へ進むわ』と唄った。

●逝ってしまった人を思い続ける気持ちが私を支えてくれている。

それをどう受け止めて、

歌手としてどう生きていくかを考えていく。

（※インタビュー記事から一部筆者意訳）

●永訣とは、永遠の別れのこと。

でもそれはけっして「サヨナラ」ではなく、

亡き人を思い続ける気持ちの「はじまり」。

【あとがき】

●目の前にはいないけれど

思い続ける気持ちが自分の支え。

でもそれは、僕が思うには

思われる側にもきっと通じている。

僕は、それを確信している。

生きる

●第二次世界大戦（1941 年 12 月 8 日―1945 年 9 月 2 日）で南方ボルネオに出征し、
ジャングルをさまよって、奇跡的に日本に帰還できた人がいる。

ジャングルを 20kg ぐらいの荷を背負い、
湿気と暑さと蚊と、敵の襲来の恐怖の中をひたすら行軍したという。

そのとき思っていたことは、ただ、「今を生きる」、それだけだった。

命がある限り生きる、ということだった、と。

この平和な時代には戦争こそないが、大自然という超巨大な敵が存在する。

いつ襲ってくるかも知れない脅威に、我々は翻弄されるばかりだ。

それはどこに住もうと同じことだろう。

それでもあの兵士が、「今を生きる」、それだけだった、と言ってくれているように、

生き抜いていきたい。命あるかぎり生きぬいていきたい。

【あとがき】

●戦争の話を母としていたら、「こんな話も聞いたことがある」と。

※僕の母は昭和７年生まれだから戦争の頃はまだ幼かったが、
　うろ覚えに、幼心にずっと忘れられなかったらしい。

その人は３人の子を持っていた。
幼い女の子と男の子、そして１歳になっていない幼児。
その彼に赤紙(戦争への召集令状)が来た。

抗うすべもない若いお父さんは出生の朝、
泣きながら、そのかわいい盛りの次男に最期のごはんを食べさせた。

そして二度と還ることはなかった。

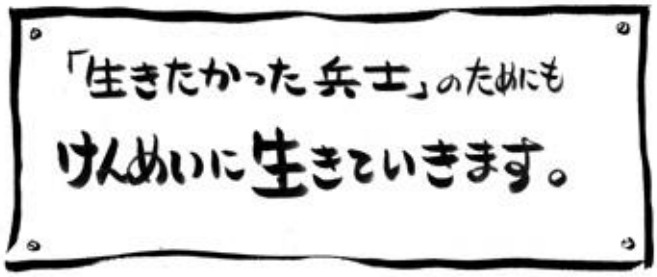
その彼は、僕のふるさとの、幼馴染のお母さんの、その父なのだ。

●別れとは、死とは、なんと冷酷なものだろう。

我々の現在は、幾多の悲しみの上にある。

生かせて頂いている。

懸命に生きていかなければ申しわけない。



命を感じている

●長女Ｙちゃんところの次女すみれちゃんは１才と７ヶ月。
抱っこすると手を首にまわしてしがみついてくる。
ギュッ！
抱っこしたまま急に重くなったと感じたら眠っている。
ズッシリ重い。

この子は生きている。

朝台所から味噌汁のニオイが漂ってくる。
その平凡な情景にふと気づく。

妻はそこにいる。

義父が死に、
妻がその後の様々なまつり事で留守にする間、
母に来てもらい家のことをしてもらう。
ベランダで洗濯物を干している。ふと思う。

母が元気にうごいている。

27 才の末っ子が義父の四十九日で帰省した。
二階の寝室に布団を敷いて
妻、末っ子、私。
川の字で寝る。
ふと気がつく。

この子はもうこんなに大きくなったのか。

寒い。
朝オシッコをする。湯気が立つ。ふと感じる。

オレは生きている。

まいにち、まいにち
命を感じている。

オレたちは生きている。
生かされている。

ありがたいことだなぁ・・・

【あとがき】

●ふだん、気にかけることもないようなことが

当たり前のようにくり返される日常。

当たり前のように思っているが、

実はなかなかの・・・

奇跡。

毎日生きているっていうことは

生かされているっていうこと。

すごいことなんだ。

少女の顔

●妻の実家の古いアルバムから彼女の写真が出てきた。

たぶん小学校５年ころの写真らしい。

かわいい。

とてもかわいい。

その子が年を経て、いまの妻になったのだ。

赤ちゃんは無垢だ。
幼児は天使だ。
小学生はかわいく、そしてだんだん反抗期に・・
中学生は反抗期まっさかり
高校生、オトナへ・・・

社会にでて世間にもまれ、

年を経るにつれて、
「人間」となる。

色々な経験や、背負うものがだんだん増えてくる。

そして味わいのある顔になる。

今年１月と３月に、相次いで両親を亡くした妻の顔は、
やはり少しやつれている。

そりゃあそうだよ。

たぶん日本の標準家庭のようなところに生まれ、
とても可愛がられて育ったのだ。

その両親が３ヶ月のうちに、二人とも旅立った。

心労はむしろここから先にくることになる。

しかし写真をみればよくわかる。
君はとても可愛がられて育った。

両親を亡くした悲しみ、
しかし、じゅうぶんに可愛がられた思い出。

そのふたつを、
合わせ鏡のように、
心にしまって生きよ。

そうすれば
心の中はいつだって
あの小学生のころのままの笑顔が
弾けているはずだ。

【あとがき】

●妻は中学校を卒業してすぐ家を出たので、

自分が、「実はすごく可愛がられた」という意識が
それほど深くはなかったようだ。

反抗期という時期でもあろう、
15 歳のころはそんなもんだ。

しかし長じて自分が親になり、親の思いを知り、
両親が老境に至るにつれてとても親孝行な娘になった。

いや、もともと親孝行なのだが、
親のほうも娘に甘えるようなことをする人たちではなかったので
いわゆる「甘い」親子関係ではなかった。

1 月、3 月、二人を亡くして
それぞれの四十九日が済むまで、
ほとんどの日を実家で過ごしている。

写真が出てきた。

亡くなった親の、そのアルバムに、
自分の小学生のころの笑顔が弾けている。
ちちとははと、わたしがいっしょにいる。

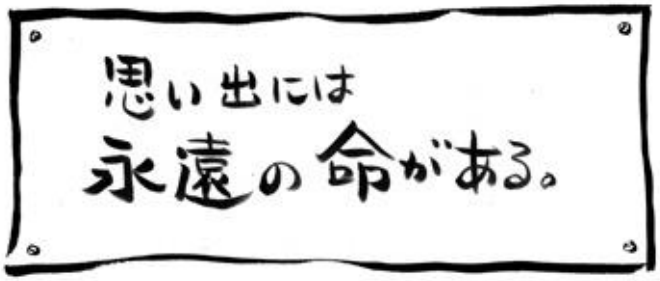
ああ、この家に生まれてよかった。

この、ちちははの子に生まれてよかった。

思い出という宝もの。

そこには、

永遠の命がある。



遠回り

●ロンドンオリンピックからは教えられることがいろいろありました。

女子レスリング 48 キロ級で金メダルを獲得した小原日登美選手。

31 才にして始めてのオリンピック出場と、
これまで決して平坦な道ではなかった。

おしどり夫婦である伴侶の康司さんのことば。

『遠回りしたように見えるけど、金が取れた。
最短距離だったんだなって思います』

(朝日新聞より引用)

結局、人は同じことに気づき、同じことを言う。

人生に『遠回り』なんて、ない。

それが「人の道」なのだろう。

【あとがき】

●その小原選手の言葉をもうひとつ。

『ひとりの力ではロンドンまで来られなかった。
みんながついているから、
マットに上がるときも怖くなかった。』

(朝日新聞より引用)

やはり、成し遂げた人は同じことを感じるようです。

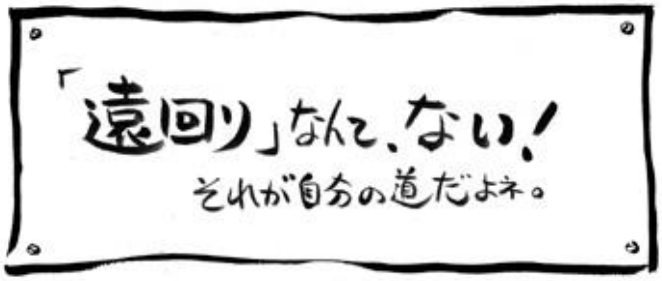
『みんなの力がすごい力にかわった。』

想いのチカラ、というのはどうやら途方もないものらしい。

にんげんは、みんな、ひとりではない。

見えないところからでも応援しているひとが、きっといます。

僕もそのひとりです。



遠き道

●『人生は重い荷を背負うて遠き道を行くが如し、と家康公の言葉にもある。』

『遠き道には良い景色もあろう。』

いまＮＨＫで放送されている時代劇「薄桜記」で、主人公の丹下典膳が言ったコトバ。

剣の達人だが嫁の兄に切りつけられて抵抗せず、片腕を切り落とされた。

刀を抜けば必ず斬ってしまう、そうすれば両家にお咎めが発せらるることを瞬時に判断してのことだった。

理不尽にもその咎で家名断絶を申し渡されすべてを失った。

詫びる妻に言ったのが冒頭のセリフだ。

『遠き道には良い景色もあろう。』

たかがドラマの、フィクションの、作り話というなかれ。

これぞ逆境における最強最高のコトバではあるまいか。

主人公は特段の希望を持って、言っている訳ではない。

人生とは山あり谷ありだが、

山、谷にとらわれるのでなく、

その道中にこそ人生の醍醐味がある、と言いたいのではないか。

いま人生の渦の中にいる人々よ。
もちろんその中には当然この僕も入っています。

『遠い道には良い景色が』

『必ずある』

そういう心で、ご一緒に歩いては行きませぬか。

【あとがき】

●時代劇には「旅は道連れ、世は情けじゃ」というセリフがときどき登場する。

その昔、人々はそうそう「旅」を楽しんでいたわけではないだろう。

この言葉の「旅」を「人生」と置き換えたら、その意味が良くわかる。

苦しいのは自分だけではない、みんな同じだよ。

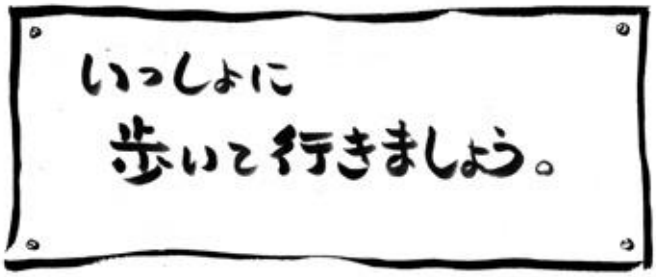
生きている限り老若男女を問わずあらゆる場所で、山と谷が待っている。

まさに「旅は道連れ」＝みんな同じなんだよ、ということ。

されば「世は情け」と続くもの。

自分がどんな状況にあっても、その情けのこころを忘れずに他に尽くしていく。

それこそそこには良い景色が待っているだろう。



たかが人生、されど人生

●ここまでお読みいただき、ありがとうございます。

わたくし前沢しんじは和歌山県新宮市に暮らす、ごくふつうのおやじです。
26 才で独立、販売促進の事務所を経営して 30 年以上になります。

2010 年にはこれまでの業務をすべてすてて、58 才で新しい分野に飛び込みました。

それは、
長年の仕事で積みあげたノウハウを執筆公開して、ビジネスのお役にたちたい、

そしてもうひとつは、僕のライフワーク、
この文集のように、「言葉で、人のお役にたちたい」ことです。

僕はほんとうに多くの失敗や挫折をくり返してきて、いろいろなかたがたに助けられて、
ここまで生きてくることができた。

そんな自分自身の体験を言葉にかえて、だれかの心に少しでも灯をともすことができればと、
「人生を変えるキッカケコトバ」というメールマガジンを毎日配信して 700 号になりました。

あたまで考えたことでなく、自分のからだを痛めて経験した言葉で綴っています。

いまもたいへんな状況にいるかたがたに、僕がなにかできることがあるとすれば

最初に書いたように、コトバで心に灯をともすことだけです。

小さなひかりでも灯せれば、と心から念じています。

人生には、いろいろなことがある。

ひとそれぞれに、同じ人生など、なにひとつない。

たかが人生かも知れないが、

しかし、されど、わが尊き人生。

いつ、どこで、どう生きていても、

いつでも、今がはじまり。

すべてのかたがたにむけて、僕は心静かにエールを贈ります。

応援しています。

遠くの地からだけれど、ずっと応援していきます。

●この文集は「キッカケコトバ」というメルマガで、日刊で発行しているものです。まぐまぐという日本一のメルマガ配信会社からの配信で、安心で、無料ですのでぜひご登録ください。
⇒　http://archive.mag2.com/0001127175/index.html

●ぜひ、ご感想をお寄せください。メールはこちら⇒　maezawa@zb.ztv.ne.jp

■前沢しんじプロフィール　（詳しくはホームページにも記載しております）

販促プランナー　/　メルマガ作家。
大学卒業後スーパー勤務を経て販促専門会社を起業し現在に至る。
2010 年より、販売促進理論およびエッセイなどの執筆活動に入る。
著書に、ビジネス書「販促キャンペーン実践法」(同文舘出版)、
エッセイ「人生の午後　男の居場所」(文芸社)、「愛ってヤツは非行に効かんのかい！」（文芸社）
がある。

■ホームページ

・(個人)　キッカケコトバ　　http://kikkakekotoba.net/
・(法人)　販促の地図　　http://maehan.jp/

■前沢しんじへのお問い合わせは・・・　（メールにてお願いします）

(有)マエダ販促　マエハンドットジェーピー
〒647-0042　和歌山県新宮市下田 1-7-36
e-mail　maezawa@zb.ztv.ne.jp
電話 0735-21-5660

※特定の宗教、政治等とは関係ありません。